

サギスゲ ～江別・新篠津・根室～

岩見沢市 齋藤 央

1 江別市 ～越後沼～

私が初めて石狩平野でサギスゲを観察したのは2016年の6月、江別市の越後沼湿原でした。越後沼研究会が活動の舞台にしていた区域よりもやや西側、沼の北岸のヨシ群落とヤナギ林の狭間に、ヨシが非常に疎らになり、ハンノキやヤチヤナギが生え、地面がミズゴケに覆われた一角があり、その中に果穂の本数が50本に満たないサギスゲが疎生していました(図1)。水平に地下茎を伸ばして殖えるサギスゲの性質を考えると、ジェネットは更に少ないように推察されました。ミズゴケ群落が良い状態で形成されていたことから、地下水位が高い状態で安定し、少なくともこのポイントでは富栄養化が進んでいないことが見て取れました。

後に他の自生地との比較で改めて認識したのですが、越後沼のサギスゲは、冠毛がわずかに茶色く濁る特徴があります。最初は、浮遊塵を含んだ雨水で汚れたかと思っただけでしたが、翌年6月にも同じ色の冠毛を付けていました。

2 新篠津村 ～相次ぐ発見～

残存湿原やその植物相を追いかけていた私は、新篠津村内の複数の湿原や当別町の蔵岱東部湿原の探索を通じて、泥炭採掘跡の窪地にミズゴケ群落が形成されることがあると知っていたので、新篠津村内にある比較的貧栄養でヨシ・ムジナスゲ・ミズゴ



図1 越後沼湿原のサギスゲ。2016年6月撮影

ケが生え、サギスゲが生き残れそうな場所を、ネット地図サービスの航空写真から判読してみました。新篠津村中心部とJR石狩金沢駅のほぼ中間あたり、篠津運河の東にある沼ノ端地区の西端に、長方形の原野が幾つかあります。いずれも原野商法売買地で、地権者から完全に見放されています。このうち、西端の原野では、1940-50年代の南北方向の泥炭採掘跡が何ら改変されること無く残っており、これまでの経験上サギスゲ発見の可能性が高いと判断しました。新篠津ツルコケモモを守る会では、沼ノ端西原野群の西端の原野を「E地区」と仮称し、新たな探索先の最有力候補としました(図2)。

2017年4月の予備探索で、最も西側の泥炭採掘跡がミズゴケ群落の発達著しいことがわかりました。とくに北寄りでは富栄養化のサインであるイワノガリヤスがほとんど見当たらず、枯れ茎の密度や高さから察するにヨシが疎らであり根元が日陰